第2節　あす、ヨコハマは、

創造的交流——新しい価値を求めて

人は、生れた時から、様々な出会いをもつ。そして、人と違った出会いから自らを発見し、新しい飛躍が始まる出会いの数、それは豊かな人生のメルクマールである

新しい価値を求めて

国際化の進展は、世界経済にしめるわが国経済の飛躍的な地位向上と相まって、企業にたいし、世界を視野においた戦略を求めている。さらに都市にたいしても、情報の技術革新のもとで、国際交流の主役であることを求めている。

また、異文化との出会いは人びとにたいし、旧来の価値観やルールだけでは、相互理解ができないことを感じさせつつある。

情報化の進展は、経営資源としての情報の価値を高めるなかで、経済のソフト化を進めるとともに、都市にたいしても情報装備が不可欠である状況をつくり出している。さらに、マス・メディアから多様なニューメディアをつかった社会への移行を進めており、パソコン通信にもみられるように、私たちの日常生活そのものを大きく変えようとしている。

高齢化の進展は、成熟化の進展と相まって生涯学習や健康づくりなど、80年時代にふさわしいライフスタイルを求めている。また、高齢者の増加は、雇用・年金など新しい社会的扶養システムの確立をせまっている。

成熟化の進展は、人びとの健康、余暇、文化などの活動を支える産業をおこし、都市に対してはアメニティを要求している。

こうした国際化、情報化、高齢化、成熟化といった新しい時代の潮流は、それぞれが複雑にからみながら、さまざまな活動主体に大きな影響をあたえており、それらを支えていた旧来の社会システムを根底からゆり動かしている。

大人たちから子どもたちへ…世代を超えた交流、それは先人の貴重な体験や知恵を子どもたちに伝える

企業のなかで

産業構造の転換、円高の進展、経済のソフト化さらに技術革新の波は、特に素材型産業を中心に、異分野への進出を活発化させており、産業の融業化、業際化が進められている。

本市においても、市が支援しているものとして、現在7つの異業種交流グループがある。なかでも(財)横浜工業館で実施している「YKプロジェクト」は、市内県内の製造業、流通業、貿易業等215社が参画している一大産業開発研究集団であり、57年以降活発な活動を行っている。

こうした異業種交流とは別に、産業界と市内6大学との産学交流が行われており、新技術や新製品の開発をねらいとした業際活動が、業種や規模を問わず幅広く展開されている。

都市のなかで

テレポートなどの国際情報通信網や高速交通網の整備は、都市間相互依存関係を深めていく。

特に、モノから文化へシフトする国際化の流れは、文化面での国際交流主体としての都市の

比重を高めるとともに、都市にたいして新しい役割を求めている。その役割とは、都市が文化を発信することであり、また、市民の草の根国際交流活動を支えることである。

横浜は、わが国においても豊富な国際交流の経験をもっており、現在進めている世界各都市とのネットワークづくりは、国際文化都市としての横浜をきづきあげることであろう。

また、都市のなかの地域においても、地域の成熟化にともない、地域間交流が高まっている。

こうした交流の高まりは、多機能多選択としての都市の魅力をさらに大きなものにしていく。

かたことの英語でも、思いが通じたとき、相手を知り、また自分を知る。お互いの違いを違いとしてわかりあえるとき人は一歩成長していく

人びとのなかで

学校では、学年のちがう友だちが増えてきた。

地域では、みこしや盆踊りなど地域行事が見なおされ、子どもからお年寄りにいたるまでの、ふれあいの場が増えている。また、市内全域でスポーツ・文化活動、ボランティア活動、国際交流活動など多様な活動をとおして、仲間の輪が広がっている。

こうした多様な交流をとおして、市民の共生と連帯がはぐくまれている。

交流の場づくり

産業、都市、地域、市民などさまざまな局面において、異質なもののぶつかりあいがあり、そのなかから、新しい価値が生まれようとしている。それは人と人との出会いであり、さまざまな価値観の遭遇である。

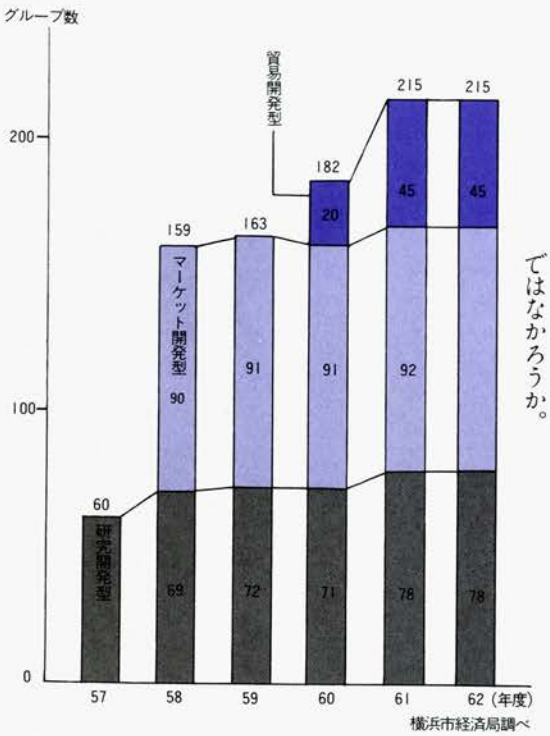
出会いの仕掛けをつくる交流の場は、さまざまな人が集うという意味で「開かれて」いなければならない。

また、交流の主体が人であるという意味で、人間の感性にマッチしたアメニティの要素を加味したものでなければならない。

人と人とのネットワークのなかから生まれてくる明日をになう、豊かで柔軟な資質をもった人材こそ、21世紀にひきつぐべき、最大の資産ではなかろうか。

YKプロジェクト参加企業数推移

めざましい技術革新と、産業構造の転換は異業種交流を軸に、新しい産業群を輩出させている。



横浜市経済局調べ